

▼東京都

シンポジウム「Think Together！ 高校生は、復興で何ができるか考えよう！」レポート

●コーディネーター 岡本美架



《3月26日、国立オリンピック記念青少年総合センター》

「中高生でもできること、だけではなく、中高生だからできることを考えよう！」と高校生ボランティア・グループ「キッズウィンドウ」が開催したシンポジウムに、被災地の中高生や、中高生中心で支援をしている団体、支援したい中高生など約50名が参加しました。

第1部では、仙台市から参加した中学3年生と高校1年生の姉妹が、宮城県内の震災後のスライドをバックに震災時の様子やこの1年間の話を、また、都内に避難している中学3年生の男子は、避難の様子や東京での暮らしについて語りました。

支援活動の報告では、中高生の国際NGO「フリー・ザ・チルドレン・ジャパン」からは中3の男女2名と高1女子1名が、街頭募金、相馬市の学校に扇風機を送る支援、書き損じハガキの収集活動について紹介しました。全国で約300名の中高生が活動する「クラブ・ワールド・ピース・ジャパン」からは中3男女2名が、宮城県名取市閑上中学校を拠点に、「子どもたちが笑顔で集まれる場所をつくらう！」とチャリティ・コンサートやサッカーのイベント企画や、校庭の泥かきを継続的に行なっていることを報告してくれました。「キッズウィンドウ」は、七夕やバレンタイン時のお菓子の販売での寄付集めや、都内に避難している子どもたちと社会科見学や料理教室での交流を紹介しました。

活動報告ではアイデアを実現するための行動力の速さはもちろん、SNSを使いこなし、複数の団体をかけもち、自ら団体を立ち上げ、パワポでのプレゼン、遠方同士でSkype会議など、そのパワフルさに圧倒されました。

ワークショップでは、第1部の感想や支援・復興への思い、これから自分たちは何ができるか、実現するには何が必要かなどを話し合いました。被災地に行きたくても親の反対や学校で

行けないという子もいましたが、各グループからの発表には、被災地の高校生との交流イベント企画や高校生にボランティア参加を促すためのSNSによる情報発信など、具体的なアイデアもたくさん出されました。

「今できることを、被災地の人と一緒に考えることができ良かった」「参加して10倍くらい知識が増え、知る必要性を感じた」「ひとりではできないけれど、仲間と一緒にできることは山ほどある。輪を広げたい」といった声には充実した時間を共有でき、自分でもできる支援のヒントを得た様子でした。

「復興のために何かをしたい！」という同年代の交流が刺激になり、できることから始めることの大切さを実感した出会いが、次のアクションを起こすきっかけになってくれればと思います。

■フリー・ザ・チルドレン・ジャパン
<http://www.ftcj.com/>

■クラブ・ワールド・ピース・ジャパン
<http://www.clubwpj.com/>

■キッズウィンドウ
<http://kidswindow.net/>



連絡先

東日本大震災女性支援ネットワーク

住所：東京都文京区向丘1-7-8

TEL/FAX：03-3830-5285

E-mail：office@risetogetherjp.org

Web：http://risetogetherjp.org

twitter：@risetogetherjp

●メールマガジンをご希望の方は事務所までメールかお電話でお申し込み下さい。



東日本大震災女性支援ネットワーク

Rise Together :
Women's Network for East Japan Disaster<http://www.risetogetherjp.org>協力：国際協力NGO オックスファム
URL：www.oxfam.jp

かだりば通信 2012.4

発行：東日本大震災女性支援ネットワーク／編集人：岡本美架

〒113-0023 東京都文京区向丘1-7-8 TEL：03-3830-5285 E-mail：office@risetogetherjp.org twitter：@risetogetherjp

▼岩手県・宮城県

介護資格に挑むー外国籍女性への就労支援

●東日本大震災女性支援ネットワーク運営委員 田中雅子

三陸沿岸にはフィリピン出身の女性が数多く住んでいます。日本人男性と結婚して三世同居を経験し、高齢の家族の介護経験をもつ人も少なくありません。陸前高田市に住む佐々木クリスティンさんも、昨年亡くした夫の祖母を介護していました。

フィリピンからきた女性たちは、流暢な日本語を話すが、読み書きを勉強する機会がなかったため、多くの方が漢字が苦手なままです。介護経験があっても、求人の多い介護職に就けなかったのは、資格がないこと、またその取得に必要な読み書きをあきらめていたことも原因のひとつです。

被災地で外国籍女性に対する支援を行っている認定NPO法人難民支援協会は、2011年6月、就労支援として介護資格の取得を呼びかけました。これまでに岩手県陸前高田市と大船渡市、宮城県気仙沼市に住むフィリピン出身の18名、中国出身5名、チリ出身1名の計24名の女性が、ホームヘルパー2級の資格取得を目指して勉強をしました。話すのが得意なフィリピン出身者と漢字の得意な中国出身者が助け合うなど、背景の異なる人同士が一緒に学ぶことで助け合う関係もできました。

資格取得講座を全国で展開するニチイ学館が出張講義をしましたが、福祉制度や対人介護の中身を学ぶ以前に言葉の壁があります。日本語教師やフィリピン出身の先輩ヘルパーの講義、さらに平仮名でルビをふったテキストや補助教材など、様々な支援を受けました。

第1期生である佐々木クリスティンさんは、12月に講座を終了し、介護施設に就職することができました。「自分を待っているお年寄りと接する仕事は大変ですが、やりがいはある」と言います。第1期生9名のうち7名がすでに施設に就職し、

つい先日チリ出身の方の就職も決まりました。介護職が不足する地域だけに、他業種と比べて仕事は見つけやすいそうです。

彼女たちが手にしたのは、資格だけではありません。日本語を読み書きする力、それができると生まれた自信、子どもの宿題を見てあげられる喜び、勉強をやりとげたことに対する家族のまなざしの変化、一緒に仲間と学ぶ楽しさ、以前よりも時給の高い仕事、日本人と同じ条件下での雇用される尊厳・・・と少なくありません。

「復興とは、災害前の状態に戻すのではなく、以前より豊かな社会を創ること」と言われますが、それを実現させるには多くの壁を乗り越えねばなりません。クリスティンさんたちのように、震災後に人生の選択肢が広がったと言える人は数少ないでしょう。災害前の状態に戻ることさえ困難であることを身にしみて感じる震災から1年を経た今、資格取得に挑んだ外国籍の女性たち、彼女たちの学習を支えた指導者の方や地元のみなさんと関係を築きながら、その過程を支えた難民支援協会の試みには、見習うべき点がたくさんあると思います。

■認定NPO法人 難民支援協会
<http://www.refugee.or.jp/>



ホームヘルパー2級の修了証を見せる佐々木クリスティンさん

CONTENTS

p.2 ▼東京都 福島「自主避難者」を結ぶネットワークの拡がり

p.3 ▼埼玉県 シンポジウム「あれから1年。そして、これから：埼玉県内の被災者支援の現場で考えてきたこと、みえてきたこと」報告

p.3 ▼東京都 福島からの母子支援ネットワーク シンポジウム報告

p.4 ▼東京都 シンポジウム「Think Together！高校生は、復興で何ができるか考えよう！」レポート

▼東京都

福島「自主避難者」を結ぶネットワークの拡がり

●福島避難母子の会 in 関東 深川美子

福島自主避難者ネットワーク「てとて」オープン

東日本大震災から1年を目前にした3月3日「福島避難母子の会 in 関東」が運営する福島自主避難者ネットワーク「てとて」を都内にオープンさせるに至りました。これもひとえに、広くて綺麗な事務所を提供下さったオーナー始めとする、今まで数々の温かいご支援下さった皆様のお蔭と心から感謝申し上げます。

オープニングイベントには100名近くの方々が集って下さり「精神的、経済的な不安、放射能問題は1年経って尚、変わらず続いている」という自主避難者3組の話に耳を傾けて頂きました。DVD映像「私たちは忘れない」の上映も行いました。参加者の皆さんが、我が事のように真剣に聞き入り、見て下さっていた姿が印象的で有難く、私たちにとても「全国各地に散らばった自主避難者が情報共有と交流を行える場にしたい」という設立目的を、改めて深く実感できた日となりました。自主避難者には「友人や隣人を置いて自分達だけ逃げてきてしまった」という負い目が少なからずあり、また、知らない土地で母子だけの避難というケースも多く、胸の内を明かすにストレスを抱えている方が同じ境遇の福島の人と気兼ねなくつながれるコミュニティスペースとして、毎月の交流会やその他イベントを行って参ります。

ニューヨーク国連本部イベントに参加

翌日3月4日、避難者友人親子と共に、NGO ヒューマンライツナウ、日本弁護士連合会の要請を頂き、ニューヨーク国連本部で開催の、女性の地位委員会サイドイベント「3.11から1年～東日本大震災と原子力発電所事故の影響を受けた地方女性たちの現状」と題するセミナーに参加させて頂くため渡米しました。

到着翌日よりお世話になる皆様と打合せ、夜は市民運動家の方が主催して下さったパーティで心のこもった手作り料理のおもてなしを頂き、意見交換を行うことができました。翌々日はabc News と週刊 New York のインタビューをピースポートニューヨークオフィスで受け、避難の経緯等を記事として配信頂きました。

7日の国連イベントは国内外のNGO、政府関係者、各方面のメディア他、80名以上が参加する大盛況の中、福島からの母子として発言をさせて頂きました。夕方からは、ニューヨークの女性たちでつくるグループ Learn from 3.11NY 始めとする日本人30名以上が開催して下さったパーティに。福島出身の方もいらっしゃり、日本を離れているからこそ、より心配下さる皆様の気持ちと優しさが伝わって参りました。8日には、



てとてオープニング (撮影者: 田中龍作氏)

原発の安全性に疑問を呈するニューヨークの人々とウォール街を行進し、国連前で東日本大震災の犠牲者に祈りを捧げました。午後はNY大学で開かれた福島に関する写真展のオープニングイベントに参加し子どもたちが発言をさせて頂きました。最終日9日には、お世話になったNYの皆様がパーティを開いて下さり、今後も平和で安心して暮らしていける未来のため共につながっていきこうと固い約束をし、現在もネットを通じて交流させて頂いております。

私たちに、国内外に距離でも時間でもなく心で支えて下さる皆様がいます！この事実に感謝を忘れず、私たちの様な思いをする人がこれ以上無いよう進んで参りますので、今後ともどうぞよろしくお願い致します。



国連イベントでは、福島からの母子として、深川さん(写真左)と息子さんが発表

■「福島避難母子の会 in 関東」は、福島から避難してきた区域外避難者により昨年6月11日に発足。

「福島避難母子の会 in 関東」ブログ
http://hinanboshi.blog.fc2.com/
連絡先: hinanboshi@yahoo.co.jp

▼埼玉県

シンポジウム「あれから1年。そして、これから：埼玉県内の被災者支援の現場で考えてきたこと、みえてきたこと」報告

●With You さいたま さいがい・つながりカフェ実行委員 薄井篤子

いまま、埼玉県内には4700人を超える方々が避難所、公営住宅や民間アパートなどで暮らしておられ、時間の経過とともに、多様な課題に対する細やかな支援が求められています。一方、避難者の方々が埼玉の住民と一緒に交流会を開くなどの活動が県内各地で生まれています。

いずれもそれらの中心に女性たちがいます。3月24日、埼玉県男女共同参画推進センター (With You さいたま) では、県内で支援を行っている女性たち8人に集まってもらい、この1年に感じたことを語りあう場を企画しました。当初はクローズドな会合を考えたのですが、避難者が見えなくなりつつある状況を憂慮し、オープンな集会にしました。8人の発言者をそろえたので、1人の持ち時間が短くなりましたが、多彩な支援の姿が伝わったと思います。

立場やきっかけは様々ですが、避難者の方々の、以前の暮らしに戻りたいという切なる願いに寄り添いつつ、埼玉にいる間は安心して暮らしてほしい、そのために自分ができることを続けたいという思いは皆同じです。分断が進む中で何ができるのか、その困難さに思い悩むこともしばしばです。だからこそ、

女性支援者たちが集う場を作って交流を支えることが県のセンターとしての役割だと痛感しました。すでに精力的に動いている方々ですが、この機会を「勉強になった」と受け止めて、「女性たちが声にしていくことが大事。情報共有しながら、連携していこう」という趣旨に賛同してくれました。力がある女性は、潔くて、柔軟で、本当に頼りになります。その力を結集していかなければ、と思います。

この集会は、全国女性会館協議会による「東日本大震災女性センターネットワーク募金」事業の助成によって行うことができました。県内避難者の声に耳を傾けようと努める彼女らの営みは、災害・防災に関しての政府への要望や国際社会での女性の人権尊重の動きと連なるものです。国内外の女性団体のサポートに心から感謝いたします。

■With You さいたま (埼玉県男女共同参画推進センター)
http://www.withyou-saitama.jp/ 連絡先: 048-601-3111



▼東京都

福島からの母子支援ネットワーク シンポジウム報告

●NPO 法人子どもプロジェクト 福田恵美

やっといこうという機動力を感じました。

賠償問題、家族の分散、慣れない都会生活など長丁場となるであろう福島からの避難家族の課題は山積みです。これからは、避難されている方と福島に残っている方、どちらにも負担や不利益にならないような支援を考えていかなければなりません。未曾有の災害を経験し、子どもを中心にした新しい社会の構築と意識改革が余儀なくされているのではないのでしょうか。福島からの母子支援についてお考えの方、ご協力いただける方はどうぞご連絡ください。



■「福島からの母子支援ネットワーク」は、旧グランドプリンスホテル赤坂で子ども支援活動を行った5つの団体 (NPO 法人子どもプロジェクト・NPO 法人キッズドア・NPO 法人 Teach for Japan・東洋大学キッズ支援プロジェクト・東京社会福祉士会スクールソーシャルワーク連絡会) が、2011年9月に立ち上げた支援ネットワーク。連絡先: NPO 法人子どもプロジェクト内 info@kodomo-project.com Tel/Fax 03-6280-8422